

Safe Communityは、日本の安全文化に何をもたらしたのか ～SCの社会実装10年の「気付き」覚書き その9～

石 附 弘

日本市民安全学会会長
元内閣官房長官秘書官

Memorandum of Safe Community in Japan During Past 10 Years. Part 9

Hiroshi Ishizuki

President of Japanese Society for Civil Safety
Former Secretary of Chief Cabinet Secretary

はじめに

セーフコミュニティ（SC）と公衆衛生危機の関係については、数年前に厚木市の審査に際して来日したSC国際審査員の趙先生（韓国）が、「MERS（中東呼吸器症候群）もSCの対象になった」とのお話が、今でも耳に残っていることは前号で述べた。外傷を対象とするSCが、感染症の終息を何故対象にするのかとの疑問をもったからだ。

ただ、歴史を紐解けば、外傷ではない自殺（自死）も昔はSCの対象ではなかった。本来は個人問題であった自殺が社会問題化し、その予防にはポピュレーションアプローチ（コミュニティ全体での取組み）が必要不可欠という環境変化に、SC指導部が新たな考え方を打ち出したのだ。とすれば、1990年、WHO初定義の新興感染症についても、コミュニティ全体での取組みが必要不可欠であり、その新たな環境変化への対応として、SCの対象としたのであろう。

これまでの10数年にわたるSCを通じての内外の識者との交流は、浅学菲才の私にとって、またとない様々な「気付き」の機会でもあった。世界の常識に触れ、研究最前線の問題関心の所在を知るうえで重要な情報入手の場でもあった。

今回の覚書きは、コロナ危機開眼と題して、コロナ情勢によって私自身が気付かされた「小事」を、雑記帳風に紹介してみたい。

と言うのも、世界のSCを牽引するリーダーにインタビューを試み、その活動の発端について共通していたのは「小事」であった。ごく身の回りのありふれた出来事の中に、皆が見逃していた「あれっ」という不審点（小事）に気付き、データを調べ（往々にしてデータそのものがない場合もあったという）、仲間と問題関心や情報を共有し、課題解決を図る（大事を制す）というプロセスを踏んでいたからだ。自分への気付き、社会への気付き、それが、SCの考え方の原点だと思う。

1 私のコロナ開眼「小事をもって大事を制す」

1-1 コロナウイルスと人類の「彼我の力」

コロナウイルスという見えない敵に、市民の安全安心が翻弄されている。当初、病気の特徴も感染経路も潜伏期間も治療法も予防法も判然としなかったが、少しずつ解明されつつあるようだ。しかし、ワクチンも治療薬もないという致命的部分は変わらない。

端的に言えば、コロナとの戦争において、敵は自在に人体に潜入できるが、人類は攻撃や防御の武器を開発できず「素手」で戦っているようなものだ。識者によれば、この戦いは長期戦の構え、1万メートル競争、あるいはフルマラソンとなることを認識すべしと。

1-2 「武器としての素手」の「正しい手入れ」とは？

2020.2.19、厚木市から人権関係の講演を頼まれ、時節柄、コロナ問題にも触れなくてはと、手洗いやマスクについて勉強した。

講演では、ノロウイルスに対する東京都健康安全研究センターの資料を紹介させていただいた。正しく効果的な手洗いは、石鹸で2回洗い、時間にして1分40秒必要、しかも親指のねじり洗いが必要だと。

体感生活安全空間の創造
睡眠、休養、栄養……基本的な生活習慣＝感染対策！

命の安全安心 新型肺炎 新型コロナウイルス(2019-nCoV)
感染予防の第一は、手洗いの徹底。

【参考】ノロウイルスを対象にして行った手洗いの時間と回数による効果
▽手洗いをしないと残っているウイルスは約100万個。
▽ハンドソープで60秒もみ洗い後、流水で15秒すすぐと数十個。
▽ハンドソープで10秒もみ洗いし流水で15秒すすぐ 2回繰り返すと約数個
東京都健康安全研究センター 森功次研究員のデータ

正しく効果的な手洗いの方法
「学んだことがあり、覚えている」と答えた人
わずか26.2%。4人に1人

消費者庁が平成27年に実施した手洗い調査
対策 ①必ず流水を使うこと ②親指のねじり洗い
③手を拭く際は共用タオルは使わない

この資料の発見によって、私のこれまでの手洗いが完全に間違っていたことを知った。親指のねじり洗いなど

やっておらず、2回洗いや濯ぎの長さもいい加減なものであった。いわば子供の頃からの惰性で「手洗いもどきこと」を何十年もやってきたわけだ。

1回洗いでは、汚れが落ちてでもウイルスが残ることも知らなかった。手洗いの時間も、全行程、正しくやれば1分40秒かかる。皆さんは、手洗いに何分を使っているか計測してみたことがあるだろうか？

余談であるが、老年学を始めてから、ものの食べ方、歩き方、歯の磨き方など、その基礎を学ぶ機会が増えたが、人として正しい科学的な生活作法を身に付けてこなかったことを反省している。TVの断片情報ではなく、しっかりした学問の根拠ある新たな生活スタイル(ニューノーマル)を学び直さなければと思う。

【参考】他分野でも、惰性の作法が間違っていることは、多々ある。

自動車の運転で「一時停止の時間は3秒」ルールだ。3秒間はその場で停止していなければいけないが、観察すると、実際には「瞬間的停止」が多い。正しい停止3秒(安全行動)がコミュニティの中で習慣化していない。

因みに、3秒の根拠は、「右を見て、左を見て、また右を見て」と左右の安全確認を、しっかり首を振って行うに要する時間が概ね「3秒」で、いわば経験則上の安全原則(法的根拠はない)が、警察の取り締まりや安全免許教習所講習での安全教育で、3秒という数字は重要だ。

些細なこと、小さなことだが、これが「命の安全」のためのニューノーマルの基本的作法、これを守らないと事故に巻き込まれるリスクが急増する。

話を元へ戻そう。「素手」が有効な武器である以上、手洗いという「小事」でウイルスにスキを見せてはならない。外出時に付着したウイルスを、家庭に持ち込まないように玄関でアルコール消毒をしてから、さらに石鹸で丁寧に手洗いすることを習慣化する。石鹸がウイルスの脂質を破壊する。食事の前など折々の手洗いが発病の未然防止につながる。これを手抜きすると、ウイルス戦争に負ける。

なお、東京都の資料では、爪の間の手洗いが書いてないが、石鹸にせよアルコール消毒にせよ、爪の間は「安全の死角」である。某看護学校の学園祭で、手洗いによる衛生効果のチェックを試みたのだが、1回の石鹸だけでは、手の甲や爪の間が紫色になって、ゾツとしたことがある。

1-3 100万個の「ウイルス飛散防止」には「マスク防衛」で！

コロナウイルスは、一回のくしゃみや咳、また、大声の会話で約200万個の粒子数が飛び散り、感染には約100万個が必要との説があり、感染予防には、感染者がマ

スクをしてウイルス拡散の防止を図ることが基本だ。米国の研究では、人は無意識のうちに(汚れた)素手で1日に顔を25回も触るといふ。マスクがあれば、手が顔に直接触れることを予防できる。手袋の重要性もここにある。「たかがマスク、されどマスク」である。

【閑話休題】 まちから外国人が姿を消したが、「3密」を英語でどう伝えればよいか？調べてみると、「3Cs / three Cs (スリーシーズ) : crowding 密集場所、enclosed spaces 密閉空間、closed contact 密接場面」と言うそう。

2 「公衆衛生危機」とは？

2-1 手強く見えない敵：ウイルス

人類は、今、2つのウイルスという見えない敵との戦いを余儀なくされている。1つはコロナウイルスなど新興感染症、1つはネット社会に棲みつきサイバーテロ等を引き起こすウイルス。

前者は、世界保健機関(WHO)の定義(1990年に初めて発表)によると、「かつては知られていなかった、この20年間に新しく認識された感染症で、局地的に、あるいは国際的に公衆衛生上の問題となる感染症」とされる。

如何に手強い敵かには幾つか理由があるが、特に「発病まで無症状」というのは、感染の予防が一番難しい。全国的対策が必要である。これを犯罪世界に例えれば、高齢者対象の振り込み詐欺で、騙されたと判る(発症)までは、被害に気付かないので、警察への届け出もないし犯罪はあるのに犯罪者を捕まえることができない。

2-2 戦争より怖い感染症

よく知られた事例であるが、第一次世界大戦による死者約1,000万人に比して、その際発生したスペイン風邪による死者は約4,000~8,000万人と推定され、約5億人が発症し、戦争終結のきっかけになったともいわれている。因みに、この時は、米国55万人、伊50万人、日本38万人、中国400万人~100万人の死者が出たとされる(世界人口は約20億人)。

さらに歴史を紐解くと、紀元前429年、ギリシャとスパルタの戦争(ペロポネソス戦争)の最中、ギリシャ最大の都市アテナイを感染症が襲い、多数の犠牲者を出し、古代ギリシャの民主政治家として知られたペリクレスもこの疫病で死亡、この戦争でのアテナイの敗北およびデロス同盟の解体を招いたといわれる。感染症は、国際政治のパワーバランスや国の命運を左右する。

・生物兵器戦争の源流にも

①紀元前3世紀、マケドニアのアレクサンドロス大王が、フェニキアが建設し地中海の覇権を拠点ティルスへ攻め込んだものの抵抗され陥落できなかった

が、偶々、陣営のマケドニア兵がペストで死んだことから、その着衣を敵の飲用水泉に投げ入れたところ、数日のうちに敵兵数千名が倒れマケドニアが勝利したという。

- ②インカ帝国（人口2,000万人）で天然痘が広がり半数近くの人々が死亡し、1年でスペインに降伏したが、これは攻め込んだスペイン兵（200人）の一人が天然痘にかかり、これがインカの人々に感染して、敗北につながった言われている。
- ③そして現代では、生物兵器が核とともに戦争の道具としての役割を担うようになった。米、ロシア、中国、イスラエルが生物兵器を研究開発（一部では実装）している由であるが、疫病を覇権欲のために戦争の武器として悪用するとは！かつて、「死の舞踏」とか「死の勝利（凱旋）」という絵画があったが、人は、この死神を悪用とする魔性を持ちあわせている。

2-3 コロナ危機の「危機」の特徴

・「無差別性」：コレラ王の裁判の再来

ところで、昔コレラが流行した際、描かれた絵に『コレラ王の法廷』（1852年 *A Court for King Cholera*）があるという（wikipedia）。雑然とした都市でコレラ（王）が相手かまわず感染や死刑を宣告していく様を描いたもので、病気の原因もわからず、人々が「3密」状態で、葬儀に追われ、途方に暮れてオロオロしている様子が描かれている。



A COURT FOR KING CHOLERA.

時代は下って、今の時代は、コレラ王ならぬ「コロナ王の裁判」に人類が泣かされている。～狙われるのは、手を洗わなかった者、3密を守らなかった人、そして高齢者か？

加害と被害の「両面的社会関係性」：コロナ危機という切迫した環境の下、「自分のための手洗いやマスクが、他者の命を守るためになる」＝「他者のための手洗いやマスクが、自分のためになる」という社会関係性が同時

進行し、自助安全意識の向上・相互扶助・お互い様意識の向上、新しい社会意識＝共生意識の醸成、「自助と共助」の同一化（運命共同体意識）という方向へ向かっているのではないかな。

例えば、3密厳禁化の中でも、多様なネットミーティングが生まれ地域コミュニティの繋がりが高まったという声も聞く。また、地域の小さなお店がハブ（結節点）になって、多数のマイクロコミュニティが誕生している。

危機（リスク）の早い「伝播性」「被害の甚大性・事態の深刻性」：社会・経済・文化・教育等、すべてに連鎖的影響 安全システムの維持管理の脅威になっている。

3 公衆衛生危機への対処

3-1 危機時と平時との対処の最大の違い

一般的に、危機時には①最重要・最優先の守るべき価値（命の安全）の明確化と、②人・金・情報など社会資源の集中運用・集中管理が必要である。感染症パンデミック対策においても同様で、社会資本の集中投入の枠組み（仕組みづくり）が重要だ。感染者の経路解明のシステム構築、保健関係者・医療関係者の円滑な任務遂行のための組織・運営補強措置、営業自粛要請と休業補償措置など危機管理上の課題が浮き彫りになってきた。

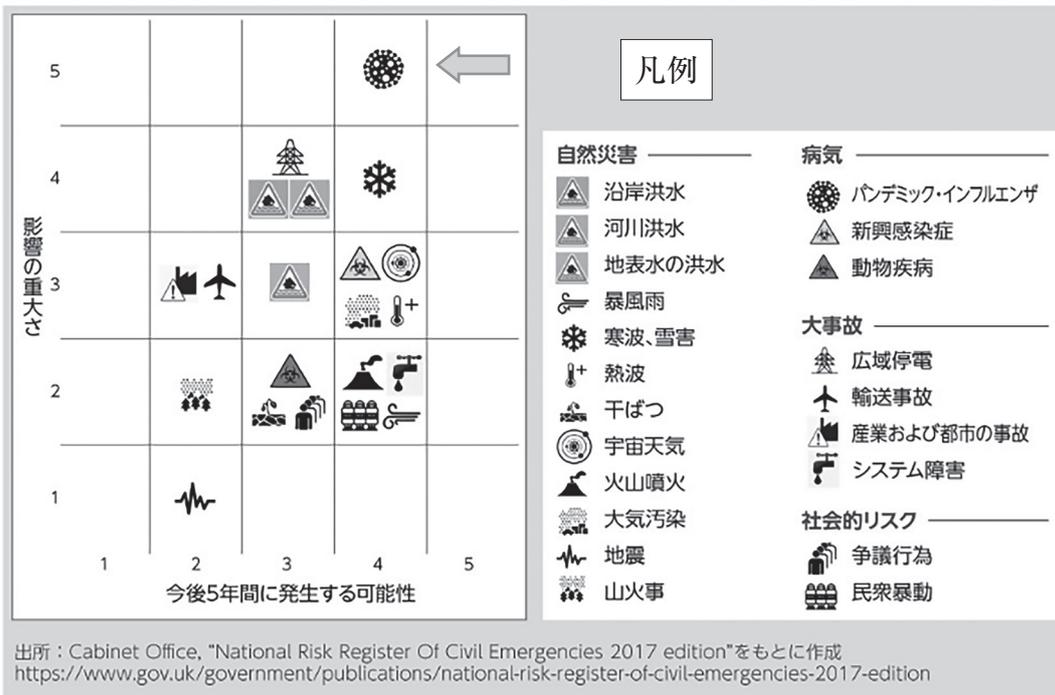
3-2 危機の予知予測（英国の事例）

英国の国家リスクレジスター（英国政府の「National Risk Register Of Civil Emergencies」）は、5年ごとに、社会的リスクについて評価分析を行い、英国政府と現場責任者が、緊急事態をどのように管理しているかの情報を国民に提供するとともに、これらの事態に備えるために国民として何ができるか（すべきか）について、アドバイスとガイダンスを示している。

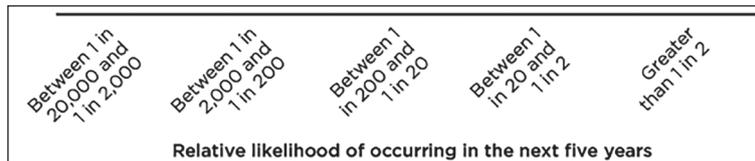
2017年版の資料によれば、今後5年間に最大1～2回しか起こらないが、発生すれば国家や社会に最大級の被害を与えるソーシャルリスクとして、パンデミックを指摘していた。表は、筆者が読み易く加工したものである。

Matrix A - Hazards, diseases, accidents, and societal risks

図1 英国のリスクマップ(自然災害・事故)



上記表の下欄1～5の可能性であるが、以下の確率としている。



3-3 「生存」(命)の価値が最優先

コロナ危機ほど、政治や行政のトップの役割と資質が問われたことはない。「生存」(命)の維持に必要な行動であることを分かりやすく国民に説いて国民の合意を得つつ、挙国一致の全国的行動変容を強力に進めていく政治力(リーダーシップ:先見性、信念、情熱)である。

【国民へ向けた名演説：メルケル首相】

パンデミック公衆衛生危機、特に新型コロナ危機は、強敵で、他のすべての価値を犠牲(制約)にしても、「生存」(命の安全)維持に必要な行動をとらなければならない。これに関連して、独のメルケル首相(東独出身(注))の名演説(2020.4.7)は、トップのあり方として、歴史に残るものとなる

(注) ドイツ初の女性首相として外交・内政の危機を抜群の安定感で乗り越え、国民からは「ムティ(お母さん)」と親しみを込めて呼ばれている。首相は、牧師だった父の転勤で生後まもなく旧東ドイツに移住。西側への移動が制限された東側で育った自身の経験を交えて演説し、国民に理解を求めた。

「旅行や移動の自由を苦勞して勝ち取った私のような人間にとって、そのような制限は絶対に必要な場合のみ正当化されます。しかし現在、人命を救うため、これは避けられないことです。私たちがどれほど脆弱であるか、どれほど他者の思いやりある行動に依存しているかということ、それと同時に、私たちが協力し合うことで、いかにお互いを守り強めることができるかが問われています。

ウイルスの拡散を封じるには、お互いの距離を保ちましょう。握手を**してはいけません**。丁寧に頻繁に手を洗い、人と少なくとも1.5メートルの距離を置き、出来るだけお年寄りとのコンタクトを避けましょう。

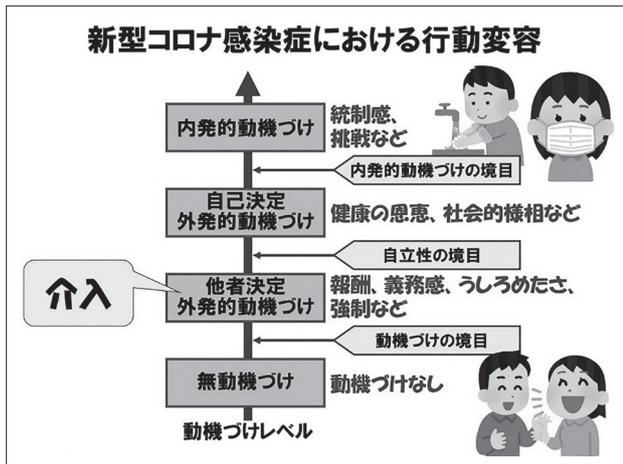
祖父母が寂しくないように、ポッドキャストに録音する孫もいます。愛情と友情を示す方法を見つける必要があります。Skype、電話、メール、そして手紙を書くという方法もあります。この社会は人を孤独にさせない様々な手段が沢山あると確信しています。

状況は深刻で未解決ですが、お互いが規律を遵守し、実行することで状況は変わっていくでしょう。このような状況は初めてですが、私たちは心から理性を持って行

動することで人命が助けられることを示さなければなりません。例外なしに、一人一人が私たちすべてに関わってくるのです」と。(下線は筆者)

3-4 国民の意識をどうすれば変えられるか？

難問である。ここでは、東海大学の公衆衛生学 渡辺良久先生のスライドが判りやすいので、ご了解を得て紹介しておきたい。



3-5 コロナ時代を象徴する新語の洪水

新時代特有の「言葉の意味」を知らないと、安全安心に生きて行けない時代になったようだ。CVOVID-19、オーバーシュート、ロックダウン、クラスター（感染者集団）、PCR検査等々これまで聞いたことも無い専門用語の氾濫現象が起きている。今となっては、8か月前の平和で安定した時代が懐かしい。

【参考】感染・伝染、流行の違い

ところで、医学系の方は常識と思うが、法学部の私には、「感染症・伝染病、流行病」のキーワードについても、この機会に勉強させていただいた。ものの本によれば、①感染：一人（一主体）の宿主が対象 ②伝染：二人（二主体）の宿主の片方からもう片方への感染 ③流行（英語：epidemic エピデミック）：複数の宿主の間（社会）における伝染で、これには、狭い地域で起きるものを地方性流行（英語：endemic）④汎発性流行（英語：pandemic）多国籍にまたがって広範囲で起きるものをパンデミックという。⑤なお、微生物が進入する前（たとえば皮膚表面に付着しただけ）などの場合は「汚染」というようだ。

3-6 スタンダード・プリコーションと手洗い

その新語の1つに「スタンダード・プリコーション」がある。いわば、手洗いの根拠法というべきものだ。

標準予防措置策（Standard precautions）とは、感染症の有無に関わらず、あらゆるご利用者・患者に対して普遍的に適用される予防策。手洗い（手指衛生）や咳エ

チケットから、個人防護具の使用、使用器材・器具・機器の取り扱い、患者配置等々、病原体の感染・伝播リスクを減少させる基本原則である。

1996年にアメリカ疾病管理予防センター（Centers for Disease Control and Prevention：CDC）が発行した隔離予防策ガイドラインにより提唱された。すべての人が、何らかの病原菌を持っているという前提で、これへの予防策を講じたものだ。そして、感染経路の遮断がもっとも有効な感染予防策と指摘している。

（なお、手洗いによる消毒法の科学的な証拠は、ゼンメルワイス（1818～65）によるもので、彼は、不遇のうちに世を去るが、後世、「感染制御の父」とも呼ばれた）。

3-7 海外の事例に関心を！

- ・ 検疫（水際隔離対策）……台湾方式が見事であった。
- ・ 市中で感染者が出た場合の対策……感染者早期発見、感染者集団（クラスター）調査
- ・ 感染経路解明
- ・ 感染者の地区、アパート、学校、高齢者施設、自宅での場所的・空間的隔離
- ・ 都市封鎖（ロックダウン）……都市機能マヒ、他都市へ伝染防止：移動の自由の制限
- ・ 自粛

3-8 パンデミックには国際協力や連携が最重要

言うまでもないことであるが、特に、パンデミック事態にあっては、国際協力や連携は重要である。平時には犬猿の仲でも、危機時には共通の大敵の鬼と戦い勝った桃太郎伝説（犬・猿・キジを部下にして大敵鬼退治に出かけた）の安全力学的意味は大きい。呉越同舟という言葉もある。しかし、某国某大統領には馬耳東風であらう。

4 人生見直しの時

4-1 九死に一生を得た時

人は、命からがら危機（死線）を乗り越えた時、昨日までの時間や仕事に追われていた自分を振り返り、自分にとって一番大切なものは何かに気付く動物のようだ。家族の絆の大切さに気付き、大切なもの（こと）のためにもっと時間を費やさなければならないと。これからの人生のあり方も、世のため人のために役立つことに、生かされた命を使おうと。これは、例えば、飛行機事故の生還者も、炭鉱の落盤事故で救出された被害者も、東日本大震災で津波被害に九死に一生を得た被災者も、皆、同じ証言をしている。そして、新たな人生の道を歩み始める。

サリン事件発生の際、緊急医療態勢をとったことで有名な聖路加国際病院の日野原重明先生も、1970年、日本初のハイジャック事件に遭遇し、4日間拘束され死も覚悟したが、韓国の金浦空港で解放された。解放後は、内

* * *

と、ここまで書いて、大事なことを言い忘れたことに気付いた。「小事」にこだわりすぎてはいけないということである。

今回、手洗いについて調べているうちに、手の汚れが気になり、何度も洗わねば不安がつる「洗浄強迫」という病気があることを知った。例えば、電車やバスのつり革、ドアノブ、エレベーターのボタン、エスカレーターの手すり、スイッチなど日常生活で手で触れるものすべてがリスクとなる。そこで、汚れや細菌汚染などの恐怖から過剰に手洗い、入浴、洗濯などをくりかえしたり、ドアノブや手すりなど不潔だと感じるものをさわれない。「手が汚い」という強い不安から何時間も手を洗い続けたり、肌荒れするほど消毒をくりかえすなど、明らかに「やりすぎ」な行為となれば、「洗浄強迫」「不潔恐怖」というところの病気になる。数字などにこだわるのも良くないようだ。

筆者も、物に触る時は、原則、手袋を使用し、どうしても直接触れなければならない時は、携帯用アルコールスプレーでの消毒を心掛けています。高齢者というハンディを背負っているため、なおさら慎重に行動せざるを得ず、コロナ後はかなり神経過敏になったと自覚している。

欧米では、精神科外来患者の約9%が強迫性障害の由であるが、日本の精神科外来では4%前後との報告があるという。また、全人口のうち強迫性障害は1、2%、50～100人に一人の割合ともいわれているが、コロナ後は、患者が増加しているのではなかろうか？

手洗いをしなければ「コロナ」に負け、手洗いをすれば「コロナ」には勝てるが、過ぎれば「こころの病気」になるというのだから、兎角、この世は住み難い。